

# 「自分の命は自分で守る」

防災団体と  
ボランティア  
水戸で意見交換会

六千人による犠牲者を出した阪神大震災から一年が経過し、災害への備えの充実強化を図ることを目的とした防災機関・団体とボランティアの意見交換会が十六日、水戸市千波町の県総合福祉会館で開かれ

「られたボランティアの目」と「防災とボランティア週

間」に合わせ、県警と県などが主催し、自治体や消防、婦人防火クラブのメンバーなど三百人が参加した。

意見交換会では、震災直後、被災者の救援活動にあたった医師と消防署員、警察官、学生と、取材にあたった記者などが被災地での体験を発表した。

発表者の一人で、ルワンダ難民キャンプやサハリン大震災などの医療活動に参加した経験もある医師の鎌田裕十朗さん(三三)は、阪神大震災を「都市生活市民の弱点が出た」と分析。「行政機能が回復するまで、自分の命は自分で守るという意識が大切」と強調。ボランティア活動については、組織化や被災者の気持ちをも十分に理解することの必要性を訴えた。



被災地での救援活動の体験談を発表する鎌田さん。水戸市千波町の県総合福祉会館